24　次の文章は、獄中で死にしていると、彼を救いに来た弟子のとの間で交わされたやり取りを描いたものである。これを読んで、問１～４に答えよ。なお、設問の都合で返り点や送り仮名、振り仮名を省略した部分がある。　　　　　　　　　　　　　　　　　〈神戸大〉二〇二二年度出題

　 左　　 　、旦　夕　①且 死㆖、㆓ 五　十　㆒、涕　 於　禁　㆒、⒜卒 感 。一　日　 　㆒、草　 ㆑ 長　、㆓ 除　不　潔　㆒。　 左　　㆒、　㆑ 　 　而　、面　額　焦　 不㆑ 。　膝　以　下、筋　骨　　 矣。　 　㆒ 而　嗚　。公　 　㆒ 而　　不㆑ 、　 　㆑ 　 　　㆑ 　「庸　奴、⒝此 何 地 也、 汝　 国　家　之　事、　　㆑ 。老　父　②已 矣、　　 　而　 大　㆒、⒞天 事、 ㆓ 支 ㆒ 。 ㆒、㆑ 姦　　搆󠄁　　今　　撲 ㆒。」 地　　刑　㆒、㆓ 投　　㆒。史　 不㆓ 一㆑ 、 而　。後　　流　 ㆓ 　㆒ 　 　「⒟ 肺 、 鉄 所㆓ 鋳 。」

（『』より）

〔注〕　○左公――左光鬥（一五七五～一六二五）。明朝末期の腐敗した政情を批判し、逮捕され、獄死した。

　　　　○炮烙――火を用いた拷問。

　　　　○旦夕――すぐにでも。

　　　　○禁卒――ろうやの番人。

　　　　○史――史可法（一六〇一～一六四五）。左光鬥の忠義の精神に感化を受け、明朝滅亡後、その再興を図るも果たさず、清軍に殺された。

　　　　○敞衣――だぶだぶの粗末な衣服。

　　　　○筐――竹製のかご。

　　　　○長鑱――土を掘る道具。

　　　　○除不潔者――清掃人夫のこと。

　　　　○庸奴――愚か者。史可法を𠮟ったのである。

　　　　○糜爛――腐敗の極みに達する。

　　　　○支拄――土台を支えること。

　　　　○搆󠄁陥――人を無実の罪に陥れる。

　　　　○刑械――刑罰の道具。

問１　傍線部①「且死」、②「已矣」をすべて平仮名で書き下せ。（現代仮名遣いでよい。）

問２　傍線部⒜「卒感焉」、⒝「此何地也」を、それぞれ「焉」と「此」が指すものを明らかにして、平易な現代語に訳せ。

◎問３　傍線部⒞「天下事、誰可支拄者」とあるが、なぜそう言えるのか。左光鬥の発言をふまえながら五〇字以内で説明せよ。

問４　傍線部⒟「吾師肺肝、皆鉄石所鋳造也」とは、どういうことか。本文に即して五〇字以内で説明せよ。

【解答と採点基準】

問１　①＝まさにしせんとするを

　　　②＝やんぬるかな

問２　⒜＝Ａろうやの番人は、Ｂ史可法が師を思う心とＣ金品にＤ心を動かされた

Ａ＝２

Ｂ＝３〔「史可法」は「弟子」なども可。「師」は「左公」なども可。〕

Ｃ＝２〔「五十金」なども可。〕

Ｄ＝３〔「心が動いた」「感心した」など同意可。〕

　　　⒝＝ＡこのろうやがＢどんな場所か、Ｃわかっているのか

　　　［別解］ＡこのろうやをＢどのような場所だとＣ思っているのか

Ａ＝３〔「ここが」など、「此」の内容が曖昧なものは０。〕

Ｂ＝５〔「どういう場」「どのような所」など同意可。〕

Ｃ＝２〔史可法をたしなめる内容が含まれていなければ０。〕

問３　Ａ左光鬥自身はわれており、加えてＢ弟子の史可法までもが捕まれば、Ｃ腐敗した国家を正す者がいなくなるから。（50字）

Ａ＝３〔「自身」はなくても可。〕

Ｂ＝４〔「弟子の」はなくても可。〕

Ｃ＝３〔「腐敗した政情を改める」なども可。文末が「～から。」となっていないものは減点１。〕

問４　Ａ左光鬥は拷問を受け無残な姿なのに、Ｂ腐敗した国家の将来を心配するＣ固い信念を持ち続けていたということ。（49字）

Ａ＝３〔「拷問に屈することなく」など同意可。〕

Ｂ＝３〔「国家」を「心配」していたという内容がなければ０。〕

Ｃ＝４〔「強固な決意」「固い意志」など同意可。〕

【書き下し文】

のせられ、問１①にせんとするをけば、をし、してにるに、卒にず。をしてにへ、にてをに、をにせしめ、とす。きれて、かに左公のをせば、ちにりにりてし、してずべからず。の、くせり。史はみき公の膝をきてす。公のを弁ずるもはくべからず、ちをひてをてをくに、目のはのごとく、りてはく、「、のや、るにり前めり。の、にる。問１②んぬるかな、汝もたをんじてにく、の事、かすべきあらんや。やかにらざれば、のするをつく、れち汝をせん。」と。りてのをりて、のをす。史みてへて声をせず、りてづ。にして其の事をべ、以てにりて曰はく、「吾がのは、なのするなり。」と。

【現代語訳】

　左公が火を用いた拷問を受け、今すぐにでも死のうとしていると聞くと、（史可法は）五十金を持ち、涙を流して泣きろうやの番人に企てをもちかけると、問２⒜番人はこれに心を動かされた。（そこで）ある日史（可法）にだぶだぶの粗末な衣服に着替えさせ、草履姿で竹製のかごを背負わせ、土を掘る道具を手に持たせて、清掃人夫とした。（ろうやに）引き入れて、かすかに左公の場所を指さすと、（左公は）地面と壁によりかかって座り、顔や額は焼けただれて見分けることができなかった。左の膝から下、筋骨はことごとくなくなっていた。史は（その）前に進み出て跪き（左）公の膝を抱いてむせび泣いた。公はその（史可法の）声を聞き分けたが目は開くことができず、そこで（史可法が）気力を奮って（腕を伸ばして）指でまなじりを開くと、（左公の）目の光はかがり火のようで、怒って言った、「愚か者め、問２⒝このろうやがどんな場所か（わかっているのか）、なのにおまえは（ここまで）進んで来た。国家の事は、腐敗の極みに達して今ここに至っている。老父（たる私）はこれまでだ、おまえもまた身を軽んじて大義がはっきりわかっておらず、天下のことについて、誰が土台を支えることができる者だろうか、いや誰もいない。速やかに去らなければ、邪な者が（おまえを）無実の罪に陥れるのを待つまでもなく、私が今すぐにおまえを殴り殺してやる。」と。そこで地面の上の刑罰の道具を手探りして、投げ撃つ姿勢をした。史（可法）は口を閉じて声を発しようとはせず、走って（ろうやの外へ）出た。後に常に涙を流してその事を述べ、そして人に語って言った、「私の先生の（心がある）肺や肝は、みな鉄や石で鋳造したようなものだった。」と。